

群馬の森

美術館ニュース

no. 182
2020 10/1佐賀町エキジビット・スペース
1983-2000
現代美術の定点観測

2020年9月12日[土] - 12月13日[日]

会場：展示室1

休館日：毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

観覧料：一般830（660）円、大高生410（320）円

*（ ）内は20名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名、
群馬県民の日（10/28）に観覧される方は無料

① 本の現代美術が飛躍的に発展した1980年代、世界のアートシーンには、ドイツにクンストハレ（コレクションを持たない美術館）があり、アメリカではニューヨークのPS1（廃校となった公立小学校を改修し展示ギャラリーとアーティスト・イン・レジデンスを併設）が先鞭をつけるなど、新しい作家を生むインフラストラクチャーの開発が多く見られました。

そのような状況の中、パルコなどの企画広告ディレクターであり、「現代衣服の源流展」（京都国立近代美術館、1975年）や「マッキントッシュのデザイン展」（西武美術館、1979年）などのキュレーション、またプライベートブランドの先駆けでもある「無印良品」の発案立ち上げなどに関わった小池一子は、東京都江東区佐賀町にあった食糧ビル（1927年竣工）の3階講堂を修復し、1983年に佐賀町エキジビット・スペースを開設しました。佐賀町エキジビット・スペースは、美術、デザイン、ファッション、建築、写真といった従来のジャンルを超えた、日本初の「オルタナティブ・スペース」として海外からも注目される存在となりました。

佐賀町エキジビット・スペースで行われた展覧会は106回、関わった国内外のアーティストは400人以上にのぼり、2000年12月に幕を閉じるまで、多種多彩な現在進行形の美術を発信し続けました。その一連の活動は「定点観測」という言葉に集約することができます。本展は、開設から17年にわたる佐賀町エキジビット・スペースを拠点とした定点観測を通して、日本の現代美術の軌跡を辿るものです。

[シンポジウム]

10月18日（日）14:00-16:00

パネラー：小池一子、田野倉康一、森村泰昌

会場：群馬県立近代美術館講堂 ※要申込・定員50名・無料

* 申込方法など詳細はHPをご覧ください。



1



2



3

1 大竹伸朗 《ジェノヴァ V》 1986年
個人蔵 © Shinro Ohtake2 駒形克哉 《無題》 1985年
〔撮影：林雅之〕 MTMコレクション3 森村泰昌 《美術史の娘 王女A》
1989年 セゾン現代美術館蔵

THE 15TH GUNMA BIENNALE FOR YOUNG ARTISTS

15回目となる「群馬青年ビエンナーレ」の作品募集が始まります。今回も第一線で活躍されているアーティスト、キュレーターを審査員にむかえて開催します。

今回は、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮して当初の予定より半年延期したうえでの募集となりました。応募者の皆さんにとっても前例のない状況下での応募、制作となりますが、それだけに記憶に残る展覧会となることを期待しています。皆さんの意欲あふれる作品をお待ちしています。



群馬青年ビエンナーレ 2019大賞作品
赤松加奈《夕日の届くころ》2018-19年、アクリル・カンヴァス、パネル

群馬青年ビエンナーレ 2021 作品募集

応募資格	1990（平成2）年4月2日から2005（平成17）年4月1日までに生まれた方
募集締切	2021年1月19日（火）当日必着
出品料	無料
審査員	荒木夏実（キュレーター／東京藝術大学准教授） 澤田知子（写真家） 鈴木ヒラク（アーティスト） 長谷川新（インディペンデントキュレーター） 鷺田めるろ（十和田市現代美術館館長） ＊敬称略・50音順
賞	大賞1点 100万円（当館買い上げ） 優秀賞1点 50万円 奨励賞5点 各10万円 ガトーフェスタ ハラダ賞 50万円（同社買い上げ）
展覧会	2021年7月17日（土）－8月22日（日）
主催	群馬県立近代美術館、上毛新聞社
協賛	株式会社原田・ガトーフェスタ ハラダ

応募方法など詳細は応募要項をご覧ください。当館ホームページからダウンロードできます。希望者には応募要項を郵送します。120円切手を貼付し、送付先の郵便番号、住所、氏名を記入したA4サイズの入る返信用封筒を下記までお送りください。

| お問い合わせ先 | 〒370-1293 群馬県高崎市綿貫町992-1
群馬県立近代美術館「群馬青年ビエンナーレ 2021」係
TEL.027-346-5560 FAX.027-346-4064
<http://mmag.pref.gunma.jp>

テキストとイメージの出会うところー 『ジャズ』と『再びたがをはめられた太陽』

松下由里

当館所蔵のアンリ・マティス（1869-1954）の『ジャズ』（1947 年刊、註 1）と、ジャン・アルプ（1886-1966）の『再びたがをはめられた太陽』（1966 年刊）は、テキストと図版をいかに関係づけるかという課題についてそれぞれ興味深い試みを示している。

マティスは『ジャズ』において、色を塗った紙をはさみで切ってレイアウトした原画をもとに、ステンシルで印刷する新手法に挑戦しており、彼が手がけた挿絵本の中では唯一となるが、テキストも担当して斬新な考えを披瀝した。本書に寄せてマティスはこう述べている。「色彩の図版をもっともよくみえる状態で示すようにしなければならない。そのためには、図版とは性格の違う間を置いて図版を隔てる必要がある。そうするのには手書きの筆蹟が一番適していると私は判断した」「色彩の図版の性格と装飾的に釣り合いを取るには、筆蹟は特別大きくなければいけないと思われる」（註 2）。このような考えの下に 1 頁に 30 語ほどしか入らないほど大きな筆記体で流れるように書いたマティスの手書き文字がリトグラフで刷られ、挿入されたのである（図 1）。

アルプの詩と図版を収めた『再びたがをはめられた太陽』は、『ジャズ』のテキストが図版と図版の「間」の役割を担ったのとは対照的に、詩人であり造形芸術家である彼の二つの世界がまさしく出会う場である。本書はアルプの晩年にあたる 1966 年に、シュルレアリスムの作家の詩画集や版画集を手掛けたパリのルイ・プロデ出版から刊行されている（註 3）。詩 17 編に合計 19 点の木版画が添えられており、うち 9 点の頁大図版が 8 つの詩の間に置かれ、読み手は自ずと詩句と図版のそれぞれ独立した世界を行き来することになる。これらの詩においては、自由な連想やことば遊びのリズミカルな動きの一方で、動植物や天体などを指し示すことばが紡ぎ出す、親しみ深い、あるいは宇宙的なイメージが深く遠くまで拡がっていく。例えば、第 6 番目の詩（註 4）の右には、頁大の図版が置かれる（図 2）。

図版ひとつひとつの色彩の響きを際立たせ、流れるような文字で伴奏したマティス。凝縮された詩句とシンプルな色や形の組み合わせから、不思議で原初的な世界を覗かせるアルプ。本という場に、それぞれのアーティストの集大成ともいえるものがたりが、繰り広げられている。

（註 1）当館では、本として綴じられたテキストを伴う『ジャズ』ではなく、図版のみを中央で折らずにアルバムとしてセットした 100 部の中の第 17 番を所蔵している。

（註 2）マティス「ジャズ」（エッセイ集）、『新収蔵品展 マティス「ジャズ」図録』29 頁、神奈川県立近代美術館、1986 年

（註 3）アルプ『再びたがをはめられた太陽』は、エディション番号 1-150、I-XX、および 1/15-15/15 を付して計 185 冊刊行された。当館では 150 番中の第 16 番を所蔵している。さらに図版 15 点のみを和紙に刷った別刷りスイート（1/40-40/40、I / I-X/X）50 セットが刷られ、詩集の 1-40 と I-V、他 5 冊に添えられている。当館の第 16 番は和紙のスイート 16/40 付きである。



図1 アンリ・マティス『ジャズ』より 18-19頁



図2 ジャン・アルプ『再びたがをはめられた太陽』より 詩第6番

（註4）詩第6番の試訳

VI

彼女は夢を見た 彼女は歌った
変わらぬ現実について
彼女は夢を見た 彼女は歌った
生ける鏡たちのことばを

彼女は行ってしまった
オリヴ色の乳房を持つシメールにのって
生ける風景の中の
人々の間を通り抜けて

静かで白いファサードのある
シュロの神殿は
波の舌先に立ち
去ってしまった人の面影を守っている

友の会だより

現在、友の会では、一般（個人）の方を対象にした半期会員（10/1～翌年 3/31）を募集中です。半期会員は、年会費の半額 1,000 円で、当館に加えて 4 つの美術館の観覧料減免などの特典があります。是非この機会にご入会ください。

■観覧料が減免となる美術館

群馬県立近代美術館・群馬県立館林美術館〔両館あわせて有効期間中 1 回無料、ほか半額〕
高崎市美術館・高崎市タワー美術館・高崎市山田かまち美術館〔団体割引相当額〕

■主な事業

- ＊展覧会・教育普及事業・広報への支援・協力のほか、コンサートや講演会等を開催。
- ＊会報の発行、ミュージアム・ツアーなど、会員のための事業を実施。



令和元年度初夏のミュージアム・ツアー
（国立西洋美術館）



令和元年度秋のミュージアム・コンサート
（演奏：森村恭一郎ジャズグループ）

【お問い合わせ先】 群馬県立近代美術館 友の会 Tel.027-346-5560（館代表）/ Fax.027-346-4064

1 1970年ヨーロッパに渡った白川昌生は、76年からドイツのデュッセルドルフ国立美術大学で学び、83年まで同地を拠点に活動しました。帰国後は群馬県吾妻郡六合村(現・中之条町)に住み、89年には勢多郡大胡町(現・前橋市)に転居、以後前橋を拠点に活動を続けています。

この作品は、デュッセルドルフ時代の82年頃からはじめられた「赤一彫刻」シリーズの一環に位置づけられるドローイング作品です。滞欧中白川は、およそ100年前に西洋から持ち込まれた「美術」という制度を無自覚に受け入れてきた日本の歴史を顧みて、一点透視図法に代表される西洋のものとは違う、開放的で可動的な空間表現を求めました。本作では、中央の塔のような形態をはじめ線的、面的な要素の強い様々な形態が、遠近法に従うことなく、等価に空間に並んでいます。立体においても、木材を構成し染料で全体を赤く染めた複数の形態を空間に配置するインスタレーションが展開されましたが、現在、

それらの立体作品が残されていないことを考えると、本作を含む「赤一彫刻」シリーズのドローイングは、80年代の白川の活動を示す貴重な作品と言えます。さらに、それぞれの形態に主従関係を設けず、奥行きのない画面上にフラットに配置するという点では、むしろドローイングにおいて白川の意図は明確に示されています。

この作品は、89年、前橋の煥乎堂3Fギャラリーで開催された個展に出品されています。この個展はその後白川にとって重要な作品発表の場となる煥乎堂における初めての展示となりました。また、白川はこの年から北関東造形美術専門学校に勤務し、後に併設の北関東造形美術館を舞台に「場所・群馬」の活動を展開していくことになります。本作は白川のターニングポイントの一つに位置する作品と言えるでしょう。

この作品は、12月13日まで、コレクション展示「80年代 日本の美術」(展示室5)において展示されます。



白川昌生 (1948-)
《赤一彫刻》
1987年
オイルパステル、鉛筆・紙
135.4×251.0cm
安達真枝氏寄贈

Collection

コレクション展示

[展示室2・6]

■日本と西洋の近代美術Ⅲ

9/12～12/13

当館の収蔵品より、印象派から20世紀前半の西洋近代絵画ならびに彫刻、群馬ゆかりの作家や明治から昭和を代表する作家たちによる日本近代洋画を展示します。

[展示室3]

■現代の美術Ⅰ 9/12～12/13

多彩な表現による20世紀後半以降の美術を紹介します。

[展示室4]

■ミロの版画 9/12～10/18

■生誕120年 南城一夫

10/20～12/13

今年で生誕120年を迎える、前橋出身の画家・南城一夫の特集展示をおこないます。



オディロン・ルドン
《ペガサスにのるミューズ》



南城一夫《鯛の静物》

[展示室5]

■80年代 日本の美術 9/12～12/13

[展示室7] 山種記念館

■祈りの美 9/12～10/18

■田崎草雲と小室翠雲 10/20～11/15

■群馬ゆかりの日本画家 11/17～12/13

人々は、神仏やその象徴に祈りを捧げることで、心の平穏や幸せを願い求めてきました。「祈りの美」では自分や誰かのために祈るという行為やその対象、そこに寄せる人々の想いに注目します。つづく「田崎草雲と小室翠雲」では、師弟でもあった2人の南画家の作品を通して近代の南画の展開をみようとするものです。「群馬ゆかりの日本画家」では、磯部草丘や福田元子など近代以降に活躍した作家たちをご紹介します。



英一蝶《鐵通図》



田崎草雲
《千山万水図》

